

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | いじめ問題についていろいろ |
| Author(s) | 王, 茜 |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 15期 : 71 - 84 |
| Issue Date | 2001-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038906 |
| Right | |
| Relation | |



いじめ問題についていろいろ

王 茜

序文

暴力といえば、頭の中に映る映像はやはり戦争、暴力団、薬物乱用、暴走など一連の大人世界の問題である。しかし、学校という相対的に閉じた空間のなかで子供たちのあいだで密かに行われていた一種の「生けにえの儀式」が深刻化し、もはや学校空間には収まり切れないくらいの現象として浮上してきた。それは、子供たちの「いじめ問題」である。もちろん、それは日本だけの問題ではなく、世界中どの国でもいじめ問題がある。

いったいどういうことがいじめといえるか？まず、「いじめ」を簡単に定義してみよう。

それは学校において複数の生徒たちが、一人ないし少数の生徒を標的として特定化し、その標的に対し繰り返し、反復継続して有形、無形の暴力をふるうことである。

この定義で重要なこと：

- 1、複数の多数者が特定の個人（少数者）を責めるという集団的行為であること。
- 2、反復継続性つまりいじめプロセスと併せて暴力の多様性をもつこと。
- 3、いじめられる、いじめるの関係は一方的に補完的であるということ。すなわちいじめ側の複数といじめられる側の一人（少数）はただ分断されるのではなく、いじめという現象を反復継続的に成立させるために、いじめられる側は標的の位置をとり続けるように強要されるのである。しかし、いつも同じグループの成員と見られ、いじめ問題がなかなか発見されにくい。

いずれもいじめ側といじめられ側の子供たちは、いじめ問題に陥るまでには、必ず、多くの要因が複雑に絡み合っているため、本稿でまず、いじめ問題の実態を述べ、その原因を分析し、さらに対処方法と改善策を検討したいと思う。成長過程にあって、いじめと悪戦苦闘する子供たちへの応援にするつもりである。

一、いじめ問題は主に存在する範囲、主な方式。

(1) 幼稚園で見られるいじめ

幼児期は まだ独立した意識や主張を形成しておらず、感情も未分化な状態に置かれているため、この時期のいじめっ子は ただテレビの人物あるいは自分の親をまねし、むやみに相手をやっつけるくらいの原始的な攻撃行動をとりやすく、そして、相手に与える痛みを共感できる気持ちは、まだ十分に形成されていないので、その時期において

さえ、いじめという差別意識の芽が子供の心の中に生みやすい。しかし、その時期のいじめは学校に発生する事件よりそんなに酷くないし、すぐ仲直りするかもしれないし、大人たちは、ただの子供の喧嘩と見なし、無視する可能性もある。更に いじめっ子の親にとって、「うちの子は元気で強いなあ。」と嬉しくて楽しんでいることも多い。実はそれを通じて、子供に「自分より弱い人を殴るなんか大丈夫だ。そして、褒められるかも。」という危ないメッセージを伝え、偶然発生した一時的ないじめは たぶん 自分の力を示すための癖になるかもしれない。しかし、その時期の子供は、身心の未熟性によって、自分の周りの大人に深い依頼感と信頼感を持って、親からのあるいは保育員からの諭を十分受け入れられるのである。それゆえ、幼稚園時期のいじめは もし大人の関係者がもっと注意を払えば、十分抑止できるはずだ。

(2) 小学校でみられるいじめ

小学校のいじめは、いくつかの特徴がある。まず、精神的、性格的な理由に基づくいじめより、身体的(体力的)な理由によるいじめが数多い。例えば、太っているとかが、顔にアザがあるとかがの外見上の欠陥を攻撃の対象とし、アダ名をつけて、はやし立てたり、集団で面白半分に殴る蹴る、拳に出ることがよくある。

次に幼稚園の時のいじめと違って、集団で一人(少数)の子供を標的とし、くりかえして暴力をふるうことが多い。手段も単純な攻撃活動から、持ち物を取り上げたり、隠したり、汚したり、時には、金品を強要することもある。つまり、陰湿化の傾向が出る。以上、いじめの具体的な手口について挙げてみたが、小学生の場合、社会的な考えや対応方法がいまだ未熟で未発達であるために、ちょっとしたトラブルで、感情の統制がとれなくなり、相手に暴力で訴える傾向が見られる。特に、小学生の友達の作り方は接近性の原則(身近にいて、いつも顔を合わせる人と親しくなりやすい傾向のこと)によって成り立っており、中学生のように性格や考え方の似た者同士が友達になれるということわりと少ない。その原則に基づいた友達関係に、親愛の情を示すためのふざけとしてのいじめは、仲直しもしやすいという側面もある。

(3) 中学校でみられるいじめ

中学校のいじめの場合は、ちょうど思春期の年齢層に符合しているために、「攻撃行動」のうえに、「性衝動」も、いじめの要因としては強いといってもよいかもしれない。したがって、小学校でみられるいじめより一層に集団化、陰湿化、悪質化している。よくあるのは、小学校時代のいじめられっ子が、逆転していじめっ子になるケースである。これは無意識のうちに過去の恨みを報復する一面がみられる。小学校と違って中学校の場合、比較的、精神的な理由に基づくいじめが多いということがいえる。それぞれの事態はすべて13—15という独特で不安定な年齢層によって起きる。中学生の場合は小

学生当時の自分より家族への依頼性、先生への服従心から脱却して自分の意識、主張に気付き、はじめて子供の世界から離れ、自分を大人の世界に進めたがる心理に支配され、さまざまな「独立活動」を始める。この時期は家族以外の他人を意識し始める時期であるだけに、自己中心的な振舞いをする事が多い、人間関係に基づいてさまざまな摩擦や葛藤を起しがちであろう。しかも、学校の受験体制をめくり、はじめて成長の圧力を感じて、トラブルに巻き込まれやすい状況である。またいじめの態様は特定の子に集中、固定化し、長期にわたる傾向もこの時期の特徴である。

(4) 高校でみられるいじめ

高校になると、小、中学校と比較して、いじめの件数はかなり少ない。恐らく、高校生は中学生より精神状態がさらに成熟し、そして、大学入学試験も近づき、勉強に集中しなければいけないからであろう。高校は小、中学校と違って管理がそんなに徹底的しておらず、学校に適応できなかつたり、居づらくなつたりすれば、自分の意志によってさっさと退学できるという逃げ道が用意されているということも要因の一つであるかもしれない。高校のいじめには幾つかの特徴が指摘できる。まず、いじめっ子の言動はヤクザ的で、抵抗しようなら、さらにいじめの執拗さは激化するために、いじめられっ子は絶えず戦々恐々としていなければならないのである。次は、この時期のいじめっ子は、小、中学校に比べて欲求不満や挫折感など心理的葛藤を深く抱え込んでいることが多いため、いじめの手口も幼稚っぽく大胆であり、いじめられっ子にとっては死を選択するほどのダメージをうけてしまう場合がよくある。その暴力傾向が強くなるにしたがって、小、中のようにいじめがとりもつ縁で仲良くなるという例はほとんど見当たらなくなる。最後に、上級生が訓練の名を借りて下級生に対していじめ的な暴力行為を行うことは少なくない。運動部での仲間割れや先輩間の派閥争い、それに伴う後輩へのしごきはもはやいじめとってよいであろう。

(5) 大学でみられるいじめ

大学のいじめは いままであまり社会、教育者の注目を引かなかつたようである。なぜかという、大学のいじめは中、高等学校より、数も少ないし、事態もそんなにひどくないからである。そして、厳しい入学試験を経て、皆 高校のエリートとして大学に入られるから、中、高のように弱者を標的にしていじめるケースが減り、年齢からいうと更に大人に近づいて、怒り、憎しみ、嫉妬、違和感などの心理があつても、理性的に取り扱う場合が多い。つまり大学時代に入ると精神状態の不安定期が過ぎてさらに成熟するわけである。しかし、ここでも精神的な理由に基づくいじめの状況をうかがうことができる。

たとえば、特定の人肉体的、身上的コンプレックスをえぐって茶化し、それをネタ

にするとか、コンパの席上、盲目の人の真似をするとか、またドジをやった友達をみんなで「しんちゃん」(身体障害者の略)と呼んで揶揄するなど、いじめの手口はパロディやギャグによるものが目立つ。彼らにあっては論理的思考は不得手で、「あ、わかる、わかる」とか「言えてる、言えてる」という短絡的で感覚的な反応しかできず、全般的にモラトリアム的なアパシー(無気力)状態に置かれているといってもよいかもしれない。大学生の風潮がすべてこうだとは言いきれないが、少なくとも、いじめにつながる差別用語をいとも容易に口にすると大学生が一部存在するという事実は確実だろう。

二、事例を通じていじめの実態を紹介する

(1) 自殺、致死事件

昭和61年2月1日東京都中野区立中野富士見中学校2年生鹿川裕史君(13)が「葬式ごっこ」のいじめに遭い、岩手県のJR盛岡駅ビルのトイレで遺書を残して首吊り自殺したことによって、いじめの実態が表面化し、大きな社会問題となったが、その後も、いじめによる、自殺事件が相次いでいる。その中の一例を挙げる。

大阪府高石市の私立中学校二年生の男子は、中二のはじめころから、同級生にいじめをうけ、二学期がはじまってから学校へ行けなくなった。親はこの事実を学校からの連絡で知り、事情を辛抱強く聞き出した。そして、はじめて同級生からいじめられていることを聞いたが、しかし、詳しいことは聞き出せなかった。親は担任教師へそのことを伝えしたが、特に何の対応もなされなかった。その後、その男子は一時的に登校したが、また、学校へ行けなくなり、遺書などもないまま、自殺した。No.1

このように、自殺にまで追いやられるということは、いじめによる被害の最たるものである。それと同じように、いじめによる被害生徒の死亡という形で現れることもある。

平成3年11月15日、豊中市中学三年の女子が同級生四名(男子二名、女子二名)から暴行を受け、頭蓋内出血により、死亡した。その女子は、一年生のころから同級生に頻繁にいじめをうけていた。彼女にいじめを行った生徒は学年全体の三分の一にも達したという。いじめの方法は蹴るという暴行から、彼女を「——(彼女の姓)菌」と呼ぶことまでさまざまであった。特に酷いのは彼女に暴行を加えるとき、手で殴ることなどがなかったということだ。彼女を汚いものに差別し、手で叩くと手が汚れると考えていたからであった。No.2

(2) 暴行、金品要求、傷害による不登校、精神あるいは肉体障害

「死」に至らなくても、生命・精神・身体を侵害する事件は多くのいじめにみられる。それらの事件では、大体長期にわたり、いじめが繰り返して行われている特徴がある。事件発生の原因はさまざまであって、子供たちに与える苦痛も長く続き、さらにその子の人格形成、精神状態、今後の生活に強く影響をもたらす可能性も高いので、

学校、家庭、社会などが相互に連帯協力して対応に当たり、更に酷い事態にならないように、いじめに苦しんでいる子供を救うように頑張る必要がある。

中学二年の女子が 放課後友人と水泳部の部屋で着替え中、同級生五名に呼び出され、学校の廊下で、「あんた生意気やんか」「スカート短い、靴下短い」「ちくったろ」「あんた死ぬか」などといわれながら、顔、首、腰、足などを手拳やホウキで連続的に殴られたり、足蹴されたりした。さらに、水をかけられたり、直立させられて脅迫され、「これからあいさつします」「これから敬語を使います」「これからスカートを短くしません」などと大声で約束させられた。暴行を受けた時間は三十分以上に及び、恐怖心で極度の精神不安定状態に陥った。その後、卒業までの約一年間、不登校が続いた。No.3

(3) シカト(無視)などによる精神的な被害

現在のいじめの特徴のひとつとして、陰湿化を挙げることができる。これまでマスコミで何度も報道されてきたものは、 だいたいが暴力をによって、被害者に生命、精神の痛みをもたらす事件である。しかし、シカト、無視、いやがらせ、芸強制などのいじめもまた、被害生徒に対して、ひどい精神的な苦痛をもたらし、不登校にまで追い込むことも多い。

中学校一年生の女子は 最初クラスの男子からいじめを受けたが、すぐに学年全体に広がり、学内で本人があるいていて、服が接触すると「バイキンがつく」といって、汚れを払う格好をされるようになり、本人の机に触れると、いやがって、「バイキンがつく」といって払われるようになった。その状態が二年生の三学期まで続き、その言葉を聞くのがいやで、だんだん聴力までも落ち、あまり聞こえなくなった。そして、学校の近くに来ると、すぐ吐いてしまうようになった。病院に行って、体調がよくなったが、教師が迎えにきて腰が痛かったりして学校へいけず、現在もお不登校中である。No.4

三、いじめ問題の背景及びその原因

いじめ問題には非常に複雑な背景があり、学校のほか、家庭、社会、さまざまな要因がからんでいる。いじめ問題を単なる一つの問題として、親あるいは学校を責めるのは問題の解決にあまり役に立たないことである。そして、いじめという現象は外国にも数多くあるけれど、日本のように社会問題になったりはしない。日本では、複雑ないじめの背景から深刻なことがさまざま起きてしまっていると思うのである。子供世界のいじめはやはり象徴的である。これから、その背景そして原因について分析したい。

1、学校について

いじめは普通、クラス、クラブ、友人団体など学校を舞台に発生する。そのゆえ、毎日子供と接していて、子供のことを最もよく知っているはずの教師そして学校側はだれ

よりもいじめ問題を発見しやすい。しかし事例からみると、いじめ発見の遅れそして対応の遅れと不適切によって深刻な事態を招いたケースは少なくない。いじめが生じやすい学校あるいはクラスはいったいどの問題があるのか。

(1) 教師の無関心による事件の発生

教師は クラスの温かくて和やかな雰囲気づくりに非常に主導的な役割を果たしているはずである。調査により、生徒の間にも、また生徒と教師の間にも、全体としてのまとまりや、信頼関係、心の交流などがうまくいっていない場合は、親しい子同士はある程度交流しているが、それもとすると和やかなものでないうえ、みんなと溶け込めず、孤立した子や疎外された子が生じやすい。そして、時には教師が生徒を受容できず、気に入らない子を疎外している場合も稀にはある。それが、こどものいじめに先行していたり、並行していたりするわけで、こうなると教師が無意識のうちに生徒に対していじめを演じていることになる。そして、いじめ問題がこんなに世間に注目されているのに、それは子供世界のなかの人間関係の問題であり、教師が介入する必要がないと思ったり、自分のクラスや学校にいじめ問題など起こっていないと考えていたり、また多少いじめがあることは認めても、世間でいわれているいじめのように酷いものとは思わず、あるいはいじめ以外の問題だと錯覚したりしていることもある。

そして、教科指導には極めて熱心で、成果もあげているのだが、いじめなど関心はなく、また生徒の心の問題にあまり関心を寄せない教師が多い。こうして、学校やクラスでは、勉強に集中できる子はいいいのだが、落ちこぼれ的な子が生じて、疎外感や反発を強めて不良グループを形成したり、あるいは孤立してクラスの中でお客さんのようになってしまう。こうしたこともいじめの背景になる。

(2) いじめ発見の遅れ及びその対応の遅れと不適切な対応

前に紹介したように子供たちは「いじめの鉄則」をおそれる。鉄則の一つは先生にチクる子供に三倍で返す。その理由でいっそういじめられたり、復讐されたりすることを恐れ、また、自尊心から恥ずかしいとかんじたり、先生に話すのをいさぎよしとしないことも一方にはある。周りの子たちもいじめっ子の復讐を恐れて先生に教えないことも普通である。これが発見しにくい重要な背景といえる。例のNo.1は、その状態で、先生、両親に自分はいったいどんないじめを遭ったか一切説明もなく、遺書までも残らず、自殺した。両親は子供の学校での生活がどうであったのかを知りたいと考え、弁護士に調査を依頼した。教師は夏休みの宿題ができていないからではないか、被害者には幼いところがあるとかいって、要するにいじめに対して、何らの対処もしなかった。学校もいじめがないと言うばかりで、それ以上全く説明を拒否した。この事件を通じて、学校側にはいじめに対する発見の遅れと対応の不適切さがあったことがわかる。仮に本人や周

りの子がいわなくても、日頃からクラスの友人関係を把握していたり、気配りをして感受性を養っておけば、いじめはいくらわかるはずである。例のように、生徒が死ぬ前に、いじめ問題を発見し、悲劇を防ぐはずである。また、日頃からしっかりした指導体制があり、生徒の間、生徒と先生の間信頼関係ができていれば、何らかの情報は早めに得られるはずで、そうした体制の十分とれてないことも問題といえよう。また、学校や教師はいじめに対して適切な対応のできないことも多い。一つは対応の甘さと無責任感である。もし、担当教師をはじめ学校がいじめが被害生徒にどれほど大きな精神的、肉体的な苦痛をもたらしたかを認識できない場合、いじめを人権侵害と明確に意識しない場合は、特にそうである。「我慢がたりない」とか、「やられたら、やり返せばいいじゃない」とか、さらに「昔もいじめなんてあったんだから」といじめ側のために言い訳をすることも多い。そして、酷い事件が起こった時は例の1のように、無責任的にいじめのことを全般的に否定する。こうしたことは、子供に対してばかりか親や被害家庭に対しても、やはり空回りになったり、不信感を植え付けたりするだけである。もう一つは子供の心理が十分に理解できないことである。いじめられっ子がどんな気持ちであるか、どうして欲しいか、またどうすれば解決できるかが正しく把握できない。かえって傷つけて逆効果になることもよくある。一方、いじめっ子に対しては、やはりその心が理解できず、ただたしなめるとか、叱るとか、あるいはうやむやにしてきちんと対応しないとなってしまう。それは事件の解決にはなんの役にも立たないことだけである。他の一つは教師の主観的な対応である。正しく実態を把握せず、一部の子のいうことを信じたり、自分が決めつけたりして、一方的な対応になっているわけである。こうした対応をうける当事者は教師を恨み、そして強い不信感を抱いて、以後も心がつながらなくなってしまう。

(3) その他

学校と家庭の連携不足、教師の協力指導の不足もいじめの原因になる事例も多い。そして学校側は教育相談所などの相談機関と、病院などの治療機関との連携も不足である。いじめを絶対に許さないという共通理解の下に協力し合って対応していく体制を作る必要がある。

2、家庭について

いじめは主に学校で生じるが、学校の問題ばかりでなく家庭の問題も深くからんでいる。学生の人格養成、価値観、世界観は全部、親、家庭の教育と繋がっているからである。いじめが生じやすく、またこじれやすい家庭には、いったいどのような傾向があるのか。確かに、以前は 親の側に、精神障害があったり、不道德家庭、崩壊家庭などの

場合はいじめっ子とか、いじめられっ子になりやすかった。しかし、最近、一番問題であるのは、家庭もいわゆる中流と呼ばれ、両親も形式的に揃っており、子供の知能も身体状態も、普通程度にある場合でも、いじめっ子になったり、いじめられっ子になることである。また、成績の良い子、おとなにとって可愛い子が、大人に見えない所で、陰湿的ないじめをしている。親子関係は いったいどのように変わってしまったのか。

(1) 父親の現代の子捨て

60年代に入ると、日本は戦後の高度経済成長期を迎えた。産業構造の変化に伴って、日本家庭の生活様式や思考様式も、いつの間にか、つくり変えられつつあった。一番問題になるのは、家庭機能の脆弱、低下傾向が深まったことである。いうまでもなく家庭は、もともと、社会学習の場としての教育機能や安らぎ、保護の場としての緊張緩和機能があるはずで、そして、適切な父性（厳しさ）と母性（優しさ）のしっかりとした調和統合のうえに成り立っていなければならないはずである。しかし、いまの家庭では子供はめったにお父さんと顔を合わせなくなっている。父親は仕事のため朝早く家を出る時、子供はまだ起きていない。夜も遅く帰って、子供はたぶんもう寝てしまっているだろう。そして、核家族が進行し、少子家庭の増加に伴って、母子密着の問題を招くことになった。これは母親主導型の躾教育が一般的となって、先に指摘した社会学習の場としての教育指導力が徐々に衰退してきたことを意味しているといえよう。しかし、男の子は小さい時に母親と密着しても、成長するに従い、父親の存在を主な支えとしてくる。父親をモデルとして、「男らしさ」を習得しようとする。もし、母親ばかりに焦点を当てた形になっただけでなく、母親が夫婦間の矛盾を子供の前に暴露して、父親を軽視していれば、こどもはモデルとしての父親を失ってしまうことになる。あるいは、父親自身が特別に厳しくて、子供とのふれあいをあまり好まない場合なら、父親と子供の間溝ができてしまう。このように、子供は男性としてのアイデンティティを独力で確立しなければならなくなる。不幸にして、父親との交流につまずいて、また学校の先生も憧れや尊敬の対象になれない場合は、非行グループなどの年上の少年たちとか、テレビの暴力シーンなどをモデルとして、殴る蹴るのような行為を男性的イメージとして身につける。こんな方法で男性の優位に立てるわけではないが、そちらはまだ幼稚であるから、見かけだけでも男らしさを確立したいのである。これはその子自身をも、不幸にしている。そのゆえに仕事に夢中になる父親たちは、自分の親としての責任をしっかりと担わなければならない。子供にそれなりの自信と誇りを与えるべきである。

(2) 母親の支配的過干渉

前に述べたように、父権の後退と同時に、母親は子供の成長にとても主導的な影響を与えるようになる。母親は子供に強い愛情があり、献身的な熱心さもあるが、そのため

に子供を信頼し切れず、小言も多く、心配的な態度をとる。子供の発達段階に自立への配慮をせず、過剰な統制をしてしまう傾向がある。よくみかけるのは、思いきり自分で遊びたいから、「下に下ろして」と主張している小さい子供に、「危ない」と言い返す母親の姿である。子供の自然な欲求を無視して、支配的過保護の状態になるのである。子供の持っている強大なエネルギーの発散の機会もないまま、慢性的欲求不満がたまっていくことになる。特に思春期に入る子供が「友人との関係を深めたい。自分で考えてやるから、ほっといて」と主張したいときにも、自分なりの考え方を押さえ込み、先まわりしてべたべたと世話を焼くのである。母親は、社会的視野が狭くて、父親への不満がある場合に、常に子供を通して自己実現を図ろうと焦っている状態である。要するに、子供の出世に大きな期待をかけすぎているわけである。このように養育されると子供たちは、母親への反応として、「母親は心配性で、しつっこい」と反発したり、不信感さらに蔑視的な態度をとる場合が多い。それも外国にはほとんどみられない家庭暴力が発生する原因だと思う。

(3) 両親の無関心、放任そして養育態度、価値観の偏り

いまの日本社会は物質的に豊かになり、飽食時代と呼ばれるけれど、満腹感があっても、満足感をなかなか得られない子供も増えている。子供と両親の間に心のふれあいが欠けているためである。親がいじめとか、子供の心の問題に無関心な例はしばしばみられる。一方的に指示、命令を出し、自分の意識だけ子供に伝え、子供の考えなどまったく無視している。このようにして、子供たちの中に絶えず自己不全感、不安感がたまって、それで悩んだり、内省することが多い。また、親は子供に過保護で甘やかしていたり、過期待で過干渉であったりが一般的であるが、それら以外に放任、無関心、無責任などよくみられる。一方、親の価値観の偏りとしては、「人生はお金だ」とか、「男は強くなければだめだ」とかの考え方が親の口からよく出てきて、子供は小さい時からこれらの影響を受け、いじめを始める例もみられる。

3、社会について

(1) 受験制度の過熱化

子供たちに、何のために勉強するのか、何のために進学するのかと質問すると、返ってくる答えは 大体「いい会社に入られるように」とか、「一流の大学に入るために」というぐあいである。経済成長期に、企業が望んでいた人材は何であろうか。企業の部品として組み込むことができるような、凹凸のない、品質のよい、つまり学歴のよい人間である。就職時に学校歴が問われているに限らず、有名大学にしかこだわらない会社も多い。そして今の日本は、マークシート方式の簡便な入学試験の方法を取っている。この方式の試験が、行く手に立ち防がっているがゆえに、子供に多量の知識を詰め込み、

試験問題に手際よく反応する技術を早く得られるように、先生も親も受験生も勉強にいっぱいエネルギーを注ぎ、学校教育で安心できない場合は、子供を塾に送り込み、乱塾時代と呼ばれる状況まで作り出してしまった。そんな知育偏重の教育は、本来多様な個性と可能性を持つ子供に一律に作用しているから、「知識の詰め込み」という基準に合わない子が、はじき出されてしまう可能性は高い。その子たちは、いじめっ子になったり、いじめられっ子になったりする事件も多い。

(2) 大人世界からの影響

日本社会で、外国人に特に印象深いのは上下関係の厳しさである。それは、日本語の文法にもみえる。尊敬語、謙遜語、丁寧語がはっきりと分けられており、聞き手の年齢、地位、自分との関係の親しさによって、使う言葉も違う。もし間違ったら、失礼な人とか、躰が悪いと思われるかもしれない。そして、日本語は一つのセンテンスがどんな言葉で結ばれるか話の最後にならなければわからない。この文末で意味を決める話し方も封建時代上下関係の厳しさと関係がある。つまり、下の者は上位の人の顔色を伺いながら、文末で「ある」と言うか、あるいはムニャムニャと語尾をにごすという逃げ方をするかが決められる。さらに昔からも日本には村八分などといわれて、異質なものを、違和感のあるものを排斥する風潮が強かった。いまでもそうした特徴は形を変えつつ、根強く残っており、職場や地域社会などに、大人同士のいじめの構造がしばしば観察される。先輩と後輩、上司と部下、男性社員と女性社員、さまざまな範囲でいじめが常識のように認められるのが事実である。子供たちは小さい時からこれをみて、影響を受けて、いっそう露骨な形で行っているとみられる。子供でありながら、子供らしさがなく、陰湿で鬱屈しいいじめが多いのは、この辺の事情を反映したものと見えるかもしれない。

(3) 文化環境とマスコミ

今、子供たちを取り巻く文化環境をみると、さまざまな情報媒体の存在に気が付く。テレビ、映画、出版物（漫画雑誌、少女雑誌、写真集、AV ビデオなど）のマスコミ文化が子供たちに与える影響は少なくない。しかし、その多くは商業主義の支配のもとで、享乐的な娯楽情報が、ないしは刺激性の強い情報を流している。性文化、性風俗、性産業の著しい変化に伴い、暴力的刺激も、絵画的マスメディアの中で、有り余るほど見られる。特にテレビや映画で映し出された暴力シーンは、眉をひそめたくなるほどの場合が多い。そんな場面を見続けると、他人の苦痛の表情や攻撃に対する不感症が生じやすいのではないかと心配になる。しかし、情緒不安定で抵抗力の乏しい子供たちや、すでに非行文化に感染した子供たちは、そうした暴力シーンを模倣する恐れが強いのである。もう一つは、いじめが新聞やテレビなどで大きく取り上げられるによって、全国的な流行現象を生じ、地方のともとも平和で和やかだった地域に急にいじめ問題が増えるよう

になるとか、マスコミの影響をうけるなどである。子供は暗示性が強く、マスコミの影響を特に敏感に受けるから、判断力や抑制力の乏しいまま、無批判的にいじめを流行させてしまう。

四、いじめの対応と予防

いじめっ子にしても、いじめられっ子にしても、良い面や伸ばし得る芽は必ず持っているし、自己改善力、自己成長力も必ず持っているものである。いじめ問題に対応する者が、その子たちを支え、その潜在力を少しでも出しやすいように援助して行くのは大切なことである。

1、対応

この問題の解決に向けては、学校を中心に、家庭や、社会、また必要に応じて相談機関や治療機関が相互に連携協力して対応に当たる必要がある。

(1) 早期発見と適切な対応

早期発見は、適切な対応をするに当たってまず必要なものである。そのために、学校も家庭も子供も交友関係に注意を払い、心の動きをよく把握していることと、子供の示すサインを見落とさないことが大切である。また、いつも子供と心が通じ合っていて、信頼関係の培われていることも大切である。そして、いじめられっ子に会い、その際、受容と傾聴の態度を基本とし、子供の心にわだかまっているものを極力だしてもらおう。一方、いじめっ子に会い、同様にカウンセリングマインドをもって事情をきいていく。正確な事態を把握のは大切である。一部の子のいうことを信じたり、自分が決めつけをしたりすると、一方的な対応になっているわけである。そして、いじめの解決は担任教師だけの責任ではなく、親との話し合い、教師間での話し合いによって協力指導体制を作ることが必要である。さらにクラス全体、学年全体、学校全体に働きかけることも、不可欠である。

(2) 学級全体への対応

いじめ問題への対応は、いじめっ子といじめられっ子とだけの調整ではなくて、クラス全体、学年全体、学校全体の広い範囲で行わなければならない。なかでも、クラス全体への対応は特に大切である。

まず一つは、クラス全体の子に、いじめられっ子の心の痛みを気付かせることである。そのために、何度もみんなで話し合い、体験を出し合い、感想文をかくなども必要である。

もう一つは、いじめ事件への追究である。これは押し付けではなく、自らの反省と謝

罪ができるように指導することは大切である。

次の一つは、いじめられっ子をクラスに受け入れることである。登校拒否になっているような場合は、代表が誘いに行くとか、みんなが遊びに行くとか、すなわち、いたわりと共感をもって、いじめられっ子を受け入れ、みんなで新たな関係を迎えるわけである。

(3) 専門機関との連携

いじめが深刻になったりした場合には、専門機関に相談し、連携してその指導や治療に当たる必要がある。日頃、学校や家庭は外部にいじめが知られるのを恐れたり、敬遠したりするけれど、いじめっ子にしても、いじめられっ子にしても、神経症状態に陥る人があるのは事実である。相談機関そして精神科医の助けを求めるのは必要である。

2、予防

予防は、やはり学校が中心であるが、他に家庭、地域社会も必要である。

(1) 人間性をのばす教育

いじめは今世界的現象だと言われている。日本においてだけではないことは確かだが、日本の特徴の一つとしては、やはり、いじめられっ子を庇う子がいないことである。日本の学校も家庭も、知育偏重への反省を口にするだけではなんの役にも立たない。子供がお互いに人格と心を大切にし、思いやりとりと信頼を持つほか、人の悩みや心の痛みに関心と共感、そして他者への労わりの心を育てる教育にも、関心を寄せるのは大切である。また、正義感と勇気を持ち、正しいことは主張したり、実行したりできるようなしっかりとした心を培っていく。さらに、目標を持って頑張り、つまずいたり困難に直面してもへこたれないで、克服していけるように指導する。こうした人間として当然身につけるべきものをきちんと身につけさせることが、学校でも、家庭でも、まず大切であり、いじめの予防にもつながっていく。

(2) 相談活動の充実

学校や地域そして家庭の相談活動の充実が重要である。いまの競争社会では、子供のストレスも強く、さまざまな悩みや不安を抱いて、不適應を起こしやすい。特に思春期はそうで、心身ともに不安定になりやすいうえ、受験など人生の方法をきめる大きな試練に幾つも直面する。その折に、いつでも気楽に相談でき、心の問題を打ち明けたり、指導や方法づけを受けられる体制は不可欠である。相談活動は学校では生徒指導の担当者や、保健室の養護教諭が当たるとか、各クラスの担任もそうした機能を果たすことができる。また、地域に専門機関を充実させて、必要に応じて学校と連携する体制を作る

ことも大切である。こうすると、いじめの予防ができるほか、仮に生じても軽いうちに克服できることになる。

(3) 地域づくりと社会環境の整備

地域づくりの不十分さのため、親同士の交流も少なく、子供同士もそうである。このため、子供は地域の異年齢集団、同年齢集団との交流が乏しく、友達とのつきあい方も未熟になる。また、いったんいじめの問題が生じても、親同士の交流が乏しいので、うまく対応することができない。さらに地域の親同士、子供同士の交流を増やすとともに、地域の連携を図るのは、いじめ問題の解決に不可欠である。また、マスコミの規制と大人世界の環境浄化などによって姿勢を正しながら、みんなで健全な子供の育成するのは大切である。

結論

いじめは単なる子供世界の問題ではなく、そして単なる教育界が直面する問題でもない。それは、社会、地域、学校、家庭色々な問題がからみあって、生じた問題である。日本社会には外国人にとって理解しにくいことが多いけれども、どうしていじめが今のような深刻な事態になるのかも多くの外国人ないしには理解しにくいことだろう。わたしは、中国で二年間くらい高校の教師として働き、さまざまな子供と接してきて、中国の高校生たちの生活そして彼らの直面している問題も多少分かるようになった。受験教育と一人っ子として育ったことによる集団生活への不適應はたぶん彼たちが直面する一番の問題である。それもたぶん中国社会の中で育ったものでないと分からない問題であるだろう。この問題そしてこれを基づいて生じた問題が彼らにもたらした苦痛は、教師として心より痛感している。日本に来て、この1年間、日本の青少年たちを苦しめているこのいじめ問題について、いろいろと考えている。今のいじめは複雑になっているから、行政側と社会側が改革を手掛けなくても、教師や親は傍観しているわけにはゆけない。できることからすぐ始めるべきである。いじめのすべての事柄は、人間関係の上に成り立っているといっても、言い過ぎではない。それ故に、人間としての素朴な優しさを大切にすることを忘れてはいけないと思う。こうした心を核として、一人ひとりが心の中に生き方の基準を確立することが、人が人として生きて行くために必要なことである。

参考文献

- | | | |
|--------------|-----------|---------------|
| 託 摩 武 俊 1988 | いじめの問題事例集 | 東京：株式会社 ぎょうせい |
| 相 川 高 雄 1984 | 生徒指導の心理学 | 教育出版株式会社 |

| | | | |
|---------|------|---------------|-------------|
| 藤 本 卓 | 1993 | 登校拒否と不登校 | 一葉書房 |
| 小山田 勢津子 | 1996 | いじめの実態と予防教育 | 株式会社 学苑社 |
| 畠 瀬 直 子 | 1986 | いじめっ子 いじめられっ子 | 株式会社 グロビュー社 |